じていた。幼稚園関係者はこのいずれを自分たちの立場にするかについて明確な判断をもっていたとはいえないが、漸くそうした社会的必要に動かされ、苦しい経営の中に、簡易幼稚園などの工夫を試みていた。

他方、こうした実際界の動きの中にあって、文部省督学官であった森岡常蔵持論の幼稚園論が注目をひく。それは、幼稚園に労働者家庭に対する社会政策的役割を負わせようとはしているが、その基本線は、幼児期の発達が大学三年間の学習より心身発達上大きな意味をもち、その時代の差別扱いが人間不平等の永遠の原因となる、という教育論にあった。

この両側面の力が幼稚園令に託児所としての機能を負わしたといえようが、知育と鍛錬を第一とする当時の文教政策には、幼児期の教育は未だ厳密には重要視されず、形式的な法文の発布に終ったといわねばならないであろう。

昭和期の保育運動

愛知県立女子大学　宍戸　健夫

まず、保育運動というのは何か、ということを定義してかからねばならぬ。保育を運動としてとらえていいのかどうか、ということ自体問題になってくるからである。

保育運動は教育運動などと同様、保育のための制度・内容・方法・施設・機関などの改革や設置をめざす同志的集団活動である。これには啓蒙のための宣伝活動が必ずともなっている。われわれは保育史をこのような「運動」としてとらえる試みの重要性をかんがえているのであるが、それがとくに注目されなければならないのは反体制的運動としてあらわれたときである。

ところが、保育運動には「半官半民」の集団活動が多い。それはそれなりに評価しなければならないのであるが、一方、反体制的民間運動として保育運動が存在していたかどうか。存在していたとするならばどのようなものであったかを明きらかにしていくことは重要であろう。

その一つとして、保育問題研究会（会長城戸幡太郎　昭和十一年発足）をかんがえてみよう。

この研究会とその運動がおこってくるのには、実証主義的心理学の研究がとくにかんがえられなければならない。その保育思潮をみるに、「社会環境」、「生活力とくに生産的活動能力」「社会生活とくに協同生活」の重視などがあげられるであろうが、その一つひとつは昭和という時代背景をぬきにしてはかんがえられない。

この保育思潮の提唱は、研究者と保母たちとの一体となった研究活動を生みだし、保育の内容・方法の上にも変化をあたえたのである。

昭和期における保育会の動き

都立立川短期大学　水野　浩志

大正十五年の幼稚園令制定以前におけるわが国の主要保育研究団体としては日本幼稚園協会（明・29・フレーベル会として発足）と京